

九州9条連と連帯し取り組みを継続

JR 総連九州地協議長 平井 聡一

JR 総連九州地協は8月8日～9日に2025年長崎平和行動を実施しました。

取り組みの内容としては例年開催されている連合長崎の「被爆80年2025平和ナガサキ集会」への参加とその前後の時間を活用しての独自のフィールドワークを中心とした平和研修です。

8月の盛夏の時期の取組となるので行動は例年暑さとの闘いでもあります。ここ数年は温暖化の影響もあり、今まで以上に厳しい暑さとなっています。猛暑から酷暑へと変貌してきており、参加者の体調も考慮しながら計画をしていかなければなりません。熱中症対策なども行っていますが体が耐えることのできる限度はあります。坂道の多い長崎を最も暑い時間帯に長時間歩きながら取り組みを行うことは今後厳しくなってくる可能性もあります。地球温暖化の影響が平和活動にも影響する時代へとなってきています。

語り継ぐ戦争の実相と運動の継続

長崎県立総合体育館メインアリーナ

において開催された集会は「語り継ぐ戦争の実相と運動の継続で核兵器廃絶と恒久平和を実現しよう」をスローガンに掲げ連合傘下の多くの組合員や様々な市民団体が参加していました。

冒頭、主催者として高藤連合長崎会長は挨拶で、私たちは、この非人道的な大量破壊兵器をなくすために、「核兵



器廃絶と世界の恒久平和」を求める声を、発信し続けてきた。しかし、世界では紛争が続き、平和が脅かされ、核兵器使用の危機が高まっている。戦争で犠牲になるのは、いつも未来を支える子供や善良な国民だ。一刻も早く、国と国との争いを止めるべき。80年前の実相に触れ、地域や職場、家庭で感じたことを広めていただきたい。と挨拶を行いました。

次に芳野連合会長の挨拶では、戦後80年を迎え、原爆の悲惨な体験・記憶

を人々に伝える「語り部」活動の存続が難しくなっている。被爆の実相を学び、それぞれの職場や家庭に持ち帰って伝えていただきたい。また、いまなお、世界には 12,000 発以上の核弾頭が存在し、人類はいまだに「核兵器のある世界」に住み続けている。日本政府には、唯一の戦争被爆国として、「核兵器のない世界」の実現に向けた不断の外交努力を強く求める。と改めて核兵器廃絶、そして世界の恒久平和の実現に向け、取り組みを進めていく決意を示しました。

核兵器の残酷さ 語り継ぐ体制を

その後に被爆体験者の被爆当時の状況のお話を頂きました。今までの語り部の方たちのお話と共通しますが、やはり自らが直接見聞きした話をしますので、直接体験した人でないと出せない話の臨場感や重厚感は映画やテレビ報道とは比較ができないものがあります。言葉一つ一つの重みは会場にいる全ての人たちの心をうち当時のその場を思い出すことが出来るような雰囲気すらあります。

この方は被爆当時は爆心地から少し離れた場所に住んでいたために、直接の怪我などはなかったようですが、被爆地近くにいた家族や親せきは皆亡くなったそうです。原爆投下後にどうにかして地元にとどり着いた人もいましたが、言葉で表現することがはばかるような無残な状態でしばらく後に息を引き取ったとの話をしていました。

核兵器の残酷さ核兵器を使用する戦

争の残酷さ、どのような理由であっても争いを暴力で解決してはいけない。語り部の方の話をもとに平和の重要性を感じました。

毎年体験者のお話を頂いていますが年々高齢化が進んでいます。今回の方も被爆当時9歳と言われていましたので現在は 89 歳となります。私が平和集会に参加した当初は被爆経験者も被爆当時に成人していた方々のお話が中心でしたが、今では当時子供だった人たちの話となっています。今後語り部の高齢化と減少は課題となってきます。戦争体験を今後語り継ぐ体制を構築することが今後の課題となってきます。

強制労働など戦争加害にスポット

二日目は長崎人権平和資料館の見学をしました。以前も報告をしていますので簡略な説明としますが、この資料館は日本の戦争加害にスポットを当てた珍しい資料館です。長崎という場所であるので原爆被害がクローズアップされることが大きいですが、長崎でも炭鉱などを中心に外国人に対する強制労働等もありますので新たな視点で学ぶことのできる資料館であります。

今まででしたら 11 時 02 分の投下時刻に屋外で黙とうをささげていましたが、今年は駅前の出島メッセ長崎において「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」の同時中継に参加しました。本会場である長崎平和公園には関係者しか参加できませんが、この会場は当日飛び入りでも参加でき、広い会場の席はすべて埋まり多くの立

ち見もありました。

初めて平和祈念式典を同時中継で参加できたのは貴重な体験でした。石破



首相の挨拶も聞くことが出来ましたが、今までの総理とは若干違う趣旨での挨拶であったのが特徴的であったと思います。ここ最近の総理は従来の挨拶を踏襲する流れの挨拶に比べると、若干ではありますが石破首相の思いの入っている挨拶であったと思います。

「願わくば、この浦上をして世界最後の原子野たらしめたまえ。」長崎医科大学で被爆された永井隆博士が残された言葉を引用していました。

自民党ですので根本的には我々の考

えとは異なるのでしょうか、以前の総理よりは若干なりとも平和への意識があるのかもしれませんが。

7月の参議院選において自民・公明は過半数を割ることとなりましたが、それ以上に保守色の強い政党が議席を伸ばす結果となっています。護憲派の議員は減少し改憲を目指す議員が更に増えています。核兵器保有を主張する議員が当選するなど平和を取り巻く状況はより厳しさを増しています。

戦争が起きて犠牲になるのは女性や子供や労働者など弱い立場の人々です。保守的な政党を支持する人は自分が被害にあうことは想定をしていないことが多いです。

平和の大切さを伝え憲法9条を堅持するため、若い組合員を中心に参加者を募り平和の取り組みを継続し九州9条連と連帯し取り組みを継続していきます。

「火の雨が降った日」第39回筑紫地区「8.6 平和のつどい」

今年の「8.6 平和のつどい」は、筑紫こども会議による平和劇・朗読による「火の雨が降った日」～福岡大空襲から80年、平和の未来を創るために～が上演された。

出演者は28名の中小学生。劇は、爆音など効果音を極力抑えて、子供たちの朗読に力点がおかれ、観客の視覚・聴覚に訴えるのではなく、状況を想像し心に訴えるという演出であった。そして、福岡大空襲の悲惨な情景だけで

なく、当時福岡市内に在住の朝鮮半島出身者への偏見と差別も盛り込まれていた。

また、福岡空襲で家族が焼け死んだ兵士が、米軍捕虜の処刑に際し、「自分にやらせてくれ」と志願する情景もあった。

平和劇は福岡大空襲の悲惨な状況だけでなく、被害と加害と差別を盛り込み、戦争の現実を浮かび上がらせるという工夫がされていた。この志願兵は、

実存している。

戦争の惨禍を伝え続けていく

戦後80年の今年、ドキュメンタリー映画「巣鴨日記」に登場する西部軍主計中尉だった冬至堅太郎は、福岡空襲で母を失った翌日、司令部で行われていた B29 搭乗員の処刑に志願して加わり、4人を斬首した。戦後、BC 級戦犯になり、スガモプリズン(東京)に囚われたその日から6年分の日記を残している。

東京裁判で東条英機元首相ら国の指導者が連合国に裁かれた「A 級戦犯」を知る人は多いが、BC 級戦犯を知る人は少ない。日本が占領したアジア太平洋で開かれた約 50 の法廷で裁かれた被告は約 5700 人。約半分は、捕虜虐待を問われた人たちで、現場の兵士や軍属も含まれる。

戦時中は、国際法に違反するという認識すらなかった。死刑執行は900人を超える。(2025.8.11 西日本新聞「私の視点」より引用)

大阪・関西万博でひととき話題を集めている太平洋の小島、ナウル共和国。

日本軍は、真珠湾攻撃後米軍の反撃に備えるため、2000 人が暮らしていたナウル島に 4000 人を超える軍人・軍属を送り込んだ。そこで起こった悲劇は、平穏に暮らしていたハンセン病患者を船で沖合に連れ出し、小舟を大砲で複数回にわたり砲撃し、生き残った患者を小銃で撃った。戦後元下士官の2人に終身刑、元水兵に懲役4年の判決が下された。背後に「隔離政策」があった。

上陸した日本兵は、島に川はなく水は雨が頼りのなか、「山野の雑草、魚介、鳥、ネズミ、トカゲ、猫など食べられるものはすべて食べつくした」という。日本兵の戦没者230万人(内5万人は台湾人、朝鮮人)の6割(138万人)は戦闘自体ではなく、飢餓や病死だったとされている。

被害と加害が複雑に入り混じるのが戦争なら、両面を記憶する必要がある。

日本国憲法の前文には「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し」とある。この憲法の理念を堅持するためにも、「戦争の惨禍」が何かを伝え続ける必要がある。

「軍事訓練やめろ! 日出生台ゲート前集会」

9月15日 13時から14時 日出生台演習場ゲート前

自衛隊と米海兵隊の実働訓練(レゾリュート・ドラゴン25)が、9月11日から25日の期間、各地の基地・駐屯地・演習場で実施されます。

【編集後記】

※射程1000㌾の敵基地攻撃用の長射程ミサイルが熊本健軍駐屯地に配備、えびの駐屯地には、長射程ミサイルの「島しょ防衛用高速滑空弾」が配備される。残暑厳しいですが、「戦争させない」を合言葉に連帯の取り組みを展開しましょう。(お)